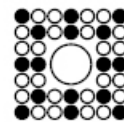


Newsletter of the British Council Japan Association

BCJA Newsletter

No.7

March 31, 1997



ご挨拶

Chairman of BCJA 中村 高遠



3月6日のBCJA委員会で関谷透前会長の後を受けて、この4月から会長に就任することになりました。日英学術交流に多大な貢献されている皆様からなるBCJAの会長職は私のような若輩にとって名誉であります。同時に責任の重さを痛感しております。一生懸命やらせて戴きますので宜しく願ひ申し上げます。また、副会長には平孝臣先生が留任し、引き続きNewsletterの編集をご担当くださいますのでご協力を願ひ致します。

私もBritish Council (BC)のフェローシップで世界が変わった一人です。Newsletter Nos.4&5には英国滞在中の家族の思い出について拙稿を寄せましたが、ここでは応募の経緯と現在に至るまでを紹介し、会長をお引き受けしたmotivationをご理解戴き、皆様のご支援を戴ければ幸いです。フェローシップへの応募は、1981年に日英教授招聘プログラムで私の所属する研究室に3ヶ月ほど滞在したMorris教授(Brunel University)の熱心な勧めによるものです。当時はまだCommunicationに自信はなく、英会話学校に通う暇もないものですから小さな5-band radioを購入し、毎日の大学への往復を利用してBBC World Serviceを聞いて勉強を始めました。余談になりますが、昨年Cardiff空港で見つけた3台目を現在は持ち歩いております。それゆえawardが戴けるとの通知を受け取ったときには“信じられない”気持ちでした。振り返って見ると、この渡英の機会が人生における分岐点であったような気がします。一つは家族との時間がもてたことです。帰国後、交通事故に遭い14才の生涯を終えた一人息子との英国での思い出は何者にも代え難い宝です(Nos.4&5)。もう一つは研究についてです。“Electron spin resonance (ESR)による多孔性触媒の研究”、これが私のBrunel Universityでの共同研究でした。ESRと

は不対電子を介して、いろいろな物質中の特性を知ろうというものです。共同研究を通じてこの方法をどのような材料分野に応用し、何が出来るかをゆっくり考える時間が与えられたことです。また、滞在中に王立化学会に入会することができたことも大きなメリットでした。王立化学会にはBrunel Universityの化学科に掲示された案内書のAll welcomeを見て、senior fellow二人の推薦を添えて気楽な気持ちで応募しました。ところが業績などの厳格な資格審査をするかもしれないとの連絡を受け、応募を後悔したものでした。しかし、最終的にはBCのフェローであることが幸いし、インタビューもなくmemberとして入会が許可される結果となった次第です。

以来、王立化学会のESR groupのannual meetingに参加し、知り合いになった方々との交流は年を追う毎に深まっております。例えば昨年も9-10月の二ヶ月、新しい発光材料についての研究で大和日英基金の助成を得て同グループの世話人であるUniversity of Wales CardiffのRowlands博士の研究室に滞在しました。そのときも一部の実験についてはUniversity of ManchesterのMabbs博士、最新の装置(180GHz)を開発されたUniversity of St. AndrewsのRiedi教授のグループの協力を得ることができました。このような幅広い研究交流が容易にできるのも、私的交流も、振り返ってみるとBCのawardが原点であることは疑い余地がありません。したがって“日英相互理解のために何かできないか”が私の中にある正直な気持ちです。最後になりましたが、さっそくBCJA委員会が取り組む一つのテーマ“英国祭98”についてご紹介し、会員の皆様のご意見を伺いたく存じます。1990年に続いて、英国祭が来年日本で開催されます。文化、芸術、スポーツ、科学など様々な分野の催しが行われるようですが、BCもその大きな役割を担っており、英国祭を実りあるものにするためにBCJAに対して助言や支援を期待しております。既に委員会でも一般の方々を対象にするとすれば、どの年齢層に対して何が出来るかなどの議論をしております。“英国祭に相応しいテーマがある”、“テーマによってはボランティアとして協力できる”、“身近にある施設を会場として提供程度できるかもしれない”、等々の自由なご意見を戴ければ幸いです。会員の皆様からのご連絡をお待ちしております。

(NAKAMURA Takato, 静岡大学工学部, Brunel University)

40年前英国への船旅

丸尾 孟

1957年初夏のことであった。ようやくケンブリッジ大学からの受け入れが決まってブリテイッシュ・カウンスル(BC)の奨学金で渡英することとなった。当時はまだ海外渡航が自由化されていない頃だったので、外貨も正規に手に入れることは難しく、費用その他旅行に関して一切BCのご厄介にならざるを得なかった時代である。大学からの海外出張許可、公用旅券の申請などすべてはじめてのことだったのでかなり忙しい思いをした記憶がある。これらの手続がようやく済んでいよいよ出発のはこびとなった。当時既に空路の利用も出来ないことはなかったが、運賃が高額で船で行くのが一般的であった。指定された船はまず横浜から香港までフランスのMM汽船会社のインドシナ三国の名にちなんだ当時としては新鋭の姉妹客船の一隻であるカンボジュ号で、香港からロンドンまでは英国P&O汽船会社のカーセージ号ということであった。いよいよ横浜港を出発する日は当時まだ海外渡航は珍しかったこともあって、教室職員はもとよりのこと事務長をはじめとして事務の人々まで大勢の見送りを受けて、5色のテープを切つてはなばなしい船出となった。船は10,000トン程度であり大きくはなかったが、フランスの客船だけあって設備はなかなかのもので、ことに食事はメニューの品を自由に選べるフルコースで、戦後まだ食生活が豊富とはいえなかった我々にとってかなり結構のように思われた。魚料理で年配の給仕頭が親切に身と骨を取り分けてくれたのを覚えている。神戸に寄港して3日か4日で最初の寄港地香港に到着。BCの香港事務所の黄氏の出迎えを受けて私にとって初めての外国の地を踏んだ。ここでカンボジュ号に別れを告げ、次の船を待つ間1週間近く香港に滞在したが、宿所は眺望の良い山上にあるゲストハウスである。ここの宿泊者は殆ど公用の英国人のように教養の高そうな人も多く見受けられ会話も楽しかった。香港駐在の総領事につてがあったので滞在中領事官員の案内で島内を観光させてもらい楽しく過ごしたが、今では日本でもごく普通に見られる飲茶の店に案内されて、このような店が東京にあったらさぞや繁盛するだろうと思ったことを覚えている。香港から乗り込んだカーセージ号は戦前横浜港でも度々見掛けたことのあるかなりの老朽船ではあったが、それでも客船としての設備は一応整っていたので船旅を楽しむことは出来た。3人のかなり年配の楽士からなる専属の楽団もあり連日クラシックからポピュラーまで演奏していた。食事は典型的なイギリス料理で味は淡白というよりは無味に近く、卓上の調味料で好みに味付けして食べるといったものであったが、メニューからいくらかでも自由に選んで食べられるということでボリュームはたっぷりであった。ただ暑い熱帯の航海にもかかわらず空調設備がなく旧式のパンカールーブル型通風筒からの風だけには閉口した。香港から中国系のBC奨学生が我々の仲間に加わった。日本を出てからかなりの日数がたったので英会話も多少は滑らかになり、同乗の旅客との会話も楽しめるようになった。香港を出て最初

の寄港地はシンガポールであった。船はここで生ゴムの積み込みのため数日停泊した。その間船主催の観光ツアーに参加してシンガポール島を一巡しジョホール水道をへだてた対岸のジョホールバルまで見物することが出来た。シンガポールは戦前のままのただずまいで戦争のあとはあまり見掛けられなかったが、立派な建物としては総督府とラッフルズホテルぐらいなもので、中国人街のごみごみした町並が印象に残った。近年になって久しぶりに訪れて高層建築の林立する超近代都市を目にしたとき往時を回顧して感慨深きものがあった。しかし当時でも植物園と動物園ではその立派さに驚かされ、イギリスの文化に対する姿勢に感銘を覚えた。とくにジョホールバルの動物園では数多くの珍しい熱帯の動物を楽しく見て回っているうち、急に足下の草叢ががさがさと音がしたかと思うと1メートルもあるかと思われる大とかげがのっそり顔を出したのにはびっくりしたことを覚えている。シンガポールは丁度英国が植民地統治を終結した時で、軍人や政府関係の人々が大勢本国に引き上げるため同じ船に乗り込んできたので船内が急に賑やかになった。これらの人々の中には本国へ帰れるということではいかにもうきうきと嬉しそうに見える婦人方が見受けられる反面、よほどシンガポールに未練が残ると見えて、航海中を通してずっとバーのカウンターでグラスを手から放さず、寂しい寂しいとつぶやいている年配の男性も見受けた。このようにしてほとんど満船になった船内では連日連夜催し物で盛り上がった。3人の老楽士氏はますます腕によりをかけてありったけのレパトリーを披露し、音楽につれてダンス愛好家は連夜舞踏に熱中した。中に1人の体格の良い婦人がよほどのダンスマニアだと見えて、音楽の鳴っているかぎりはうっとりとした目付きで終始踊り狂い、ご主人とおぼしきパートナーの男性がいささか閉口といった顔付きで相手をしているのが人目を引いていた。一方では昼夜を問わずカード賭博に熱中して派手にジャラジャラとコインの音を部屋中に響かせている一団もあった。催し物の中でガラナイトと称した仮装大会があり福引きでなにかが当たるといったものも珍しく感じた。これらの乗客は概して身分の低くない階級と見えて皆気持の良い人々ばかりですぐに親しくなることが出来た。部屋掛りのインド人も我々日本人に親愛の情を示して気持の良い航海を楽しんだ。船はシンガポールを出てマラッカ海峡を北上し次の寄港地ペナン島のジョージタウンの港に錨を下した。ここは後ろにペナンヒルという高い丘を背負い、シンボリックな時計塔を中心に海辺に沿って美しい町並のひろがった有名な観光地である。釈迦の横臥した大きな仏像のある寺や、無数の蛇が飼われている蛇寺など珍しい仏教寺院があり、またケーブルカーで山頂に上ればジョージタウンの海岸を眼下に見渡した素晴らしい眺望が開ける。途中ケーブルカーの窓からうっそうとした木々の茂みの中に大輪の野生の蘭が咲いているのを見たのが印象的であった。船は波静かなベンガル湾を横断してやがてセイロンのコロomboに入港した。現在はスリランカの首府であるが、孔雀の放してある庭園や街頭の蛇使いなど異国情緒豊かな一面で市街が思いのほか清潔だったのが印象に残っている。首相官邸などを巡り町並を抜けると椰子の並木がえんえんと

続く長く美しい砂浜に建つヨーロッパ風の瀟洒なホテルに着いた。ここで味わったセイロンティーの味が忘れられない。次の寄港地はインドのボンベイである。インド最大の都市だけあって植民地統治の象徴であるインド街を中心として官庁や商社などの重厚な英国風建物が堂々と軒を連ねる市街の立派さには感心した。背後の丘の斜面に有名な空中庭園がありここから真珠の首飾りにたとえられる長く弓状の浜辺に沿って建物の建ち並んだ風景を展望できる。ここではまた沈黙の塔と呼ばれるパールシー教(インドのゾロアスター教)の鳥葬場が遙かに眺められ、水辺では色とりどりのサリーを地上に広げて踏んだり叩いたりして洗濯している情景も珍しかった。ボンベイを後にして船は多少波に揺られながらアラビア半島の先端のアデンに到着した。ここは現在南イエメンに属し、政情が不安定で紛争の絶えないところであるが、当時はまだ英国の統治下にあつて治安も良好であつたから、安心して観光出来た。ごつごつした岩山に囲まれ草木が全く見当たらない荒涼たる砂漠の中の賑やかな町、雑踏するバザールの露店、ここはまさしくアラブの世界である。沖合に停泊する船のまわりには物売りの小船が密集して口々に品物の名前を叫び、取引が成立すれば代金や釣り銭は船から釣り下げた籠に入れてやりとりする。これからはいよいよ灼熱の紅海である。気温は40度を超え空調のない船ではやりきれない暑さに耐えねばならない。やがて右岸にシナイ半島、左岸にエジプトの砂漠を眺めながら船は進みスエズに到着した。ここより船はしばらく順番待ちをした後にスエズ運河に入り、列をなして超微速で狭い水路を進む。両岸には椰子の木が繁り耕作地に人影も見える。水位調節の閘門を過ぎビター湖の広い水域に入る。水路は再び狭くなりアガカーン所領のイスマイ、リアを通過した頃は既に日が落ちて薄暗くなっていた。いかにもアラブ風の家々に火がともり、開け広げた室内の様相がいかみ見られる情景はアラビアンナイトさながらのエキゾチックな情緒をかもしあげていた。スエズ運河の終点ポートサイドはいかにもエジプトらしい大都会である。ここからいよいよ地中海に入る。たちまち海の色が変わった。これまでの濁ったあるいは澄んだ緑色だったのと違ってインクを流したような濃い藍色となった。頬をなげる風もこれまでの熱風と違って心地よいそよ風が変わった。船は速力を増して一路西に進みやがて欧風建物の建ち並ぶマルタ島を左舷に眺めた。もうここはヨーロッパだ。

やがて建ち並ぶ家々の白壁が鮮やかなチュニスの町を左手に見てわがカーセージ号は船足も軽く地中海を通り抜け、最後の寄港地のイベリア半島南端ジブラルタルに到着した。ここは地中海の人口を占める軍事的要衝の地で古くからイギリスが海軍基地として領有しているが、街のたまたまいは完全にスペインである。土産物屋の並ぶ狭い路地を見て歩くうちに公然と銃を売っている店があるのを見てびっくりした。町の裏山へ登ってみると野生の猿が集まってきた餌をねだる。目の下には軍港が一望出来る。遙かかなたにはスペインの山並みが広がっている。ジブラルタルを出るともう大西洋だ。海の色は暗緑色に変わり波も出てきた。トラファルガル沖を通りポルトガルの沿岸に沿って北上しビスケー湾に入ると波はますます高く船は大きく揺れ

た。やがてドーヴァーの白い壁が見えはじめると波は次第に収まって日本を出てから1か月に及ぶ船旅もようやく大詰に近付いた。かくして船がテムズ河口ロンドンの外港であるテイルブリーの港に無事到着した時は8月に入っていた。上陸してまず税関の検査でカメラの持込みが意外に厳しいのが印象に残った。港にはBCの係員が迎えにきていて一同バスに乗ってロンドンへ向かい、ヴィクトリア駅に近い宿舎のロイヤルホテルにひとまず落ち着いた。初めて見る灰色にくすんだ大都会ロンドン、それは意外にも古巣に戻ったようなほっとした安堵感を与えるものであった。それはおそらく航海中に見てきた国々があまりにも異国情緒豊かな日本とまったく違った世界であつたのに対し、ロンドンはどこか東京の例えば丸の内界限と共通の雰囲気を持っているように感じられたためであろう。大学の夏期休暇の終る9月までの1か月間のロンドン滞在はBCのアレンジした懇切丁寧なプログラムのおかげで極めて有意義に過ごすことが出来た。9月に入ってケンブリッジに移り大学での研究生生活が始まった。翌年の秋も深まった頃、15か月に及ぶ英国滞を終えていよいよ帰国の途につくことになった。帰りは来たときと違って単独の旅であつた。BCの用意してくれた船は最新鋭の大型客船チューサン号である。さすがに新造船だけあってカーセージ号とは大違いで空調も整っており船の揺れ止め装置も備えていて乗り心地は至極快適だった。航海のルートは往路と同じで寄港地も全く同じだったから勝手知った土地で気楽に観光やショッピングを楽しむことが出来た。船中では日本へ赴任の宣教師の団と親しくなり退屈することなく航海を楽しんだ。デッキには大きなプールがあつて毎日のように泳いでいたのでプール番の船員とも仲良くなった。幸いに今度は途中で乗り換える必要はなく同じ船に乗ったまま横浜に着くことが出来た。かくて往復2か月におよぶ船旅を含む渡英の全日程は幕を閉じた。その後数年して海外渡航は空路によるのが普通となり、やがて日本とヨーロッパの間の定期航路も廃止されてしまった。したがって今回のような船旅を味わうことなど二度と望んでも絶対にはかなわぬこととなった。近年飛鳥のような豪華船によるクルーズが企画されるようになったが、2か月のヨーロッパ往復の費用は数百万円を下らないものになるろう。また航海の途中寄港したいいくつかの場所はその後政情の変化や民族紛争による治安の悪化などで安心して観光の出来ないところも出てきた。かつて若き日にこのような船旅を体験させてもらえたことについてはBCの好意に深く感謝したい気持である。(MARUO Hajime, 横浜国立大学名誉教授, University of Cambridge 1957/58)

オックスフォード再訪

三宅 鴻

少し古くなった記憶をたどれば、'95年7月下旬のある金曜日の夕、古巣のオックスフォードのリンカーン学寮での夕食会にのぞみ、食後の語らいの席上スピーチを求められ、短い話をした。要点は当時の感謝と、迷惑をかけたのでそのことの詫びと、その二つがポイントであつた。一晚学寮に泊り、翌朝リンカーンの発展のさまを実見し、残る

3 時間は町中をあちこち見物して回った。昔ながらの河のパンティングのさまを見ようとしていると、アイスクリーム屋さんから声をかけられたのには驚いた。

翌日曜日は旧師バーチフィールド先生と御夫人様のお宅にご案内をいただき、先ず当時やっとな執筆を完了された MEU3 版の原稿を二、三見せて頂き、庭園での散歩のあと師がドイツより頂戴されたあるプライズの説明文(独語)を見せていただいた。ゆきがかかり上独語はだいたい忘れていても朗読せざるを得ない。中途まで来ると変な形の数詞があり、どうしても読めない。見当のつかないまま印刷通りに読んでおいた(ここは帰りの機内で正しい形の見当がついた)。その他の雑談も人のうわさ話はほとんどなく、充実した3時間ほどであった。昼食も充実したものでチーズもおいしかったがとにかくレタスをほめた。師は牛津の町の郊外に住まれ、往路も帰路も師が車を運転されて楽であった。宿舎のランドルフ・ホテルのありかは40年前から知っていたが、むろん泊まるのは始めてである。快適な部屋であった。以上すべて40年の年月の差を心理的には一挙にちぢめる、おそらくこれで生涯最後かもしれない訪問であった。有難かった。

(MIYAKE Ko, Univesity of Oxford, 1955/57.)

【ボランティア募集】

Newsletter への原稿はワープロ・フロッピーを原則としていますが、手書きの原稿を投稿される方も少なくありません。そこで、手書き原稿をワープロ原稿に打ち直していただける方を募集いたします。半年間で原稿用紙10枚程度の量になると思います。できればMS-DOSあるいはMacintoshのテキストファイルを作成できる方を望みます。ご協力いただける方は事務局まで御連絡頂ければ幸いです。

"The Henry Dyer Symposium" Who is Henry Dyer ?

新井 民夫

ヘンリー・ダイアー(Henry Dyer)をご存じだろうか。東京大学工学部の前身である工部大学校の初代校長を10年間勤め、日本の工学教育の基礎を築いた教育者である。短期間しか日本に居なかった札幌農学校のクラークが余りにも有名なのに対して、この東大の先達はあまり世に知られていない。日本の産業が世界に冠たるものとなった背景に、工学部が大学内に学部として存在してきたという特異な事実がある。欧米各国においては、医学部・理学部だけが理系学部であり、工学部は高等専門学校として位置付けられてきたのと大きく異なる。このような教育制度が日本で出来上がった理由として、明治初頭からの富国強兵策が挙げられようが、同時に外国人雇い教師の存在も忘れてはならない。ヘンリー・ダイアーは、日本の工学教育制度の産みの親とも言え、高く評価されるべきであるにもかかわらず、ほとんど知られていない。特に、実学重視の考え方はダイ

アーが日本に残した工学教育理念の一大特徴といえよう。

Henry DYER (1848-1918)は明治6年-15年(1873-1882)の10年間、工部大学校の初代校長(正式には都検)を務めた。工部大学校は工部省の所管であり、初代工部卿伊藤博文がGlasgow大学のRankineに依頼して都検の選任を進め、GlasgowのAnderson College出身で24才の若さのDyerが選ばれた。Dyerは日本に渡るまでの船上で、工部大学校のカリキュラムを、15歳以上の入学、予科学・専門学・実地学の各2年ずつ6ヶ月とし、専門は土木学、機械学、電工学、造家学、実地化学、鉱山学、冶金学の7学科構成と定めた。工部省での実習である実地学の重視はその後の現場重視・実学重視の工学の元となった。Dyerは8人のイギリス人教師を連れて来日したが、その中には電気工学のAyrton、化学のDiversなどが居て、日本の工学研究の礎を築いた。明治15年(1882)、DyerはGlasgowに戻った。1918年Glasgowにて死去。

The Henry Dyer Symposium

本シンポジウムは、ヘンリー・ダイアーの出身大学であるUniv. of Strathclydeの設立200周年と東京大学工学部の前身工部大学校設置120周年とを共に記念して、日本の工学の先達ヘンリー・ダイアーの業績を評価し、21世紀に向けて工学教育と技術移転を広く討議するための日英相互交換シンポジウムである。1996年4月14日から16日には英国St rathclyde大学で開催された。そして、1997年3月3日(火)-19日(水)には東京大学工学部主催で「工学教育の現状と未来における役割の評価」をテーマとして開催される。場所は東京大学・安田講堂で、参加費は一般30000円、協賛団体会員25000円である。プログラムは「現代の邪悪なるもの」(吉川弘之・東大総長)、「Dyerの教育と21世紀へ受継ぐもの」(石原研而・東京理科大学教授)、「工学教育の姿」(Ward Nigel・東大工学部助教授)、「産業からみた工学教育」、「産業の地域遷移」(薬師寺泰蔵・慶応大学経済学部教授)、「Technology Transfer」、「現代における工学の位置付け」などの日本側発表と英国Univ. of Strathclydeからの講演からなる。最後に総長も含めて「大学にモノ申す」との一般意見発表の場となる議論の場も提供される。東京大学安田講堂を眺めながら、ここ120年の工学の進歩を考え、この先、120年を展望するのも楽しいことと思ひ、お誘いする。

参加希望の方は東京大学工学部総合試験所内総合研究奨励会(〒113 文京区弥生2-11-16, Tel:03-3812-2111 内7661, Fax:03-3815-8393)、あるいは新井民夫(Tel:03-3812-2111 内6457, Fax:03-5689-4382)までご連絡願いたい。(ARAI Tamio, 東京大学工学系研究科, Edinburgh 1979/81, arai@prince.pe.u-tokyo.ac.jp)

ローダデールとスミス

杉山 忠平

古くから最も標準的な経済学関係の学術誌とされているThe Economic Journalの最近の号にあいついでわたしの仕事が紹介された。ひとつは1995年5月に出た同誌Vol. 106,

No.436 で、そこで取りあげられたのは1994年に Routledge 社から出た単著 *Origins of Economic Thought in Modern Japan* であった。そして他は同年7月に出た次号、すなわち Vol.106, No.437 で、そこでとりあげられたのは、前年1993年に Macmillan 社から出た畏友との共編著 *Adam Smith: International Perspective* であった。もちろんこれらは予想もしなかったところであり、喜ぶべきことでも、光栄とすべきことでもあろう。しかし時間がより新しいためもあるが、投じたエネルギーと時間の点で、わたしにとっていっそう忘れがたいのは1996年1月にやはり Routledge 社から刊行された *Lauderdale's Notes on Adam Smith's Wealth of Nations* である。

ローダデールとは、スコットランド系の一貴族家の名称であるが、経済学の世界ではその貴族家の特定の一個人、つまり第8代ローダデール伯爵ジェイムズ・メイトランド (1759-1839) をさす習慣になっている。したがってわたしの本の名もそれに従っている。そのローダデールとは、アダム・スミスの経済学説の最も早期の批判者であり、ある意味でいわゆる近代経済学の最も早い先駆者でもある。

そのローダデールの蔵書が、ロンドンのオークションで落札され、東京経済大学が購入したとき、その中にあるのが判明したのが貴重書中の超貴重書の一つともいえるべき、彼の書き込みに充ちたアダム・スミス『国家論』初版本であった。というより、いったん同書を解体し、各ページ間に書き込み用紙を挿入し、二倍の厚さになったものを再製本したものであった。

書き込みは挿入紙だけでなく、諸ページの欄外や行間にまで及ぶことがしばしばであった。もっとも、逆に、欄外や行間はもとより、挿入紙にも皆無またはそれに近い場合もしばしばであったが、その書き込みも、かなり明快で読みやすいものもあれば、走り書きで判読困難なもの、再製本のさいに末尾を裁断されて各行とも不完全となってしまったもの、さらにはその後の年月とともにインクがほとんど消えてしまって、判読不能に近い状態のもの、その上、当時の貴族学者らしく、それらが私の能力を越えるフランス語やラテン語の文章である場合、等々で、まさに悪戦苦闘の連続であった。一日に一行はおろか一語も進まない場合も珍しいどころではなかった。そしてともかくもそうした判読作業が一段落した後、いよいよ印刷に付する段になって、それら批判的書き込み文と、批判対象たるスミスの当該原文部分とをどう技術的に関連させるか、といったことも新難問であった。

ともかくも一段落をつけて、1995年にケンブリッジ在居中に校正刷りができてきたとき、ローダデールの文章とスミスの原文の当該部分の印刷上の区別が予想外に不明確であることを知って、愕然とする経験もあった。それらさまざまな苦労話の一端は「ローダデールとスミス—『国家論』手書きノートを読み解く—」と題して、すでに丸善の月刊誌『学鏡』の1996年4月号に書いておいたので、それにゆずることとして、ともかく一書となって出来たときの解放感はいまだにないものであった。

(SUGIYAMA Chuhei, 東京経済大学、University of Manchester 1956/57)

サウスアンプトン大学留学

田中 彌壽雄

もともと語学の才能が無い私が、何回もの留学生試験に失敗し、もうこれが最後かと思って受験した昭和36年の試験に奇跡的に合格し、待望の海外留学の夢が叶ったときの喜びは、今も昨日のことにように思い出されます。当時私は、海外へ出る唯一の道は、留学生試験に合格することだと思って居りましたから、正に長年の夢の実現という感じでした。私の父は洋画家で、大正の末から昭和の初めにかけてパリに留学し、その時のアルバムを子供の頃からいつも見ていたことも、強い海外へのあこがれの原因であったようにも思います。当時名前も知らなかったサウスアンプトン大学へ行くことになったのは、私のイギリスでの研究先の希望として、大学ではなく、ある著名な研究者の名前を書いたことによります。この人は大学の先生ではなく、友人の教授の居られるサウスアンプトン大学を推薦されたのです。憧れの国イギリスへ行けるということで、合格の通知をもらってから、船で横浜を出るまでは、まさに夢の中という状態でした。

大きな荷物を3つも船に持ち込み、昭和37年7月20日に盛大な見送りを受けて横浜港を出港いたしました。大いに感激していたのでしょう、最初は船のデッキから海を眺めては涙を流していました。仲間の日本人は10人程度でしたが、まことに楽しい船旅でした。最初の寄港地が清水港というのには驚きましたが、次いで神戸港に寄って日本を離れ、初の外国の地香港に着きました。父のアルバムで印象の強かった香港の夜景の想像以上の美しさに感激しました。日中は船のデッキに出て、いるかの群舞、飛び魚の乱舞に目を見張っている間に、退屈することもなく、時間は流れるように過ぎていきました。シンガポールからペナン島を経てインド洋に出ますと、海はかなり荒れて来て船酔いになる人が多く、食堂に出てくる人の数も減ってきましたが、私は胸がむかつくような状態ながら何とか持ちこたえ、食事だけは欠かさず取ることができました。不思議なもので、この船酔いは、陸に上がるとおさまったように思えるのですが、再び船に乗るとまたもとに戻るといった状態で、インド洋を過ぎて波が穏やかになっても直らず、この船酔いから完全に開放されたのは、ロンドン上陸後のことでした。

ボンベイ、アデンから紅海を通りましたが、船室はクーラー無しの換気だけであったために夜中にはその暑さに我慢できず、3回程塩水を浴びて何とか砂漠の熱気に耐えることができました。スエズに到着しますと、船はスエズ運河を通過することになりますが、我々乗客はポートサイドまでのバスツアーがサービスされ、カイロではギゼーのピラミッドを見学して、大いに感激しました。地中海に出てジブラルタルに寄港した後は、気温もぐっと下がってセーターを着込むようになりました。ドーバーの白い崖の出迎えを受け約5週間の船旅を終えて、憧れの地ロンドンへ上陸しました。ロンドンの郊外に一泊し、朝の目覚めの後屋外に出て清々しい空気を吸い込んだ時の爽快な気分は今も

忘れることはできません。

ロンドンで2週間ほどを過ごして仲間と別れて一人になり、タクシーで大きな荷物を運んでウォータールー駅から目的地サウスアンプトンへと汽車で向かいました。窓外に広がる牧草地を見て、北海道の風景に似ているなあと感慨にふけているうちにサウスアンプトンセントラル駅へと到着しました。ブリティッシュ・カウンシルの職員の方の迎えを受け、瀟洒なたたずまいのゲストハウスに到着しました。この与えられたゲストハウスに大人しくしていればよかったのですが、部屋が狭かったのと、貧乏学生でもあり部屋代の少し安いところをということで、まもなく下宿屋探しを始めました。しかし次々と断られ、「日本人は嫌われているのかなあ」と少々不安にもなりましたが、幸い4軒目の家でOKということになり、部屋の広さは3倍で部屋代半分という個人住宅の二階の部屋に落ちつきました。9月の初めということで快適でしたが、冬将軍の到来とともに大いに苦労することになりました。私を受け入れてくれた教授はモーリス教授という方で、教授の部屋には文献がかなり充実しており、当時は日本では専門関係の文献はなかなか入手困難な時であり、大いに感激し、研究意欲の高まりを覚えました。よき御指導を受け学問的に大いに成果を挙げることができたと思っております。新しい部屋に落ちつき、サウスアンプトンの生活がスタートした頃、想像もしていなかったホームシックにかかってしまいました。この時特に懐かしく思い出されたのは富士山で、母に手紙を書いて富士山の絵はがきを送ってもらい、故国日本を偲びました。

外国へ行く前には、外国の木々の緑の色はどのように違うのか興味をもって居りましたが、イギリスの木々の緑の色は日本のものよりも濃く、深いという感じで、最初は何となく馴染めず、また煉瓦色を基調とする色彩豊かな町の風景にも違和感がありましたが、いつのまにか色彩感覚もイギリス風に変わり、今では日本の町の色彩不足に不満を感じるようになりました。現在の我が家の塀は煉瓦造りとしておりますのはイギリス留学の成果といえましょう。

イギリスでは多くの色々な国の友人に出会うことができました。ケニアの人、モーリシャスの人、ジャマイカの人など、全く私の知らなかった国からの人々にも会い、世界的に大いに視野が広がったように思います。日本人の居ないところに住み、日本語を話す機会もなかったのですが、昭和37年の暮れにロンドンに出て、船で一緒に来た日本人に偶然出会い、久しぶりに日本語を話したときには、日本語の発音がしにくく、必死に舌を動かして話をすることが貴重な体験として思い出されます。涙ぐましくも一生懸命に英語の発音をしていたということでしょう。またこの暮れには、ブリティッシュ・カウンシルの旅行でイギリス北部の町を訪れました。北アイルランドのベルファスト、アイルランドのダブリンを廻り、スコットランド南部のダンフリーズで迎えたクリスマスはまことに印象の深いものでした。ここは詩人バーンズゆかりの地でもあり、文字どおりのホワイトクリスマスとなり、家庭でのパーティー、酒場でのダンスへの招待等、当地の人々の暖かいもてなしに、まことに思い出深いクリスマスを過ごすことができました。

した。この年の冬の寒さは格別で、イギリス人も珍しいと言っておりました。日中の気温は零度以下で、クリスマスに降った雪は凍り付いて3月になっても消えず、春先には歩道の除氷作業も行われていました。秋に快適であった下宿の部屋の暖房には全く苦労しました。少々古い下宿の私の部屋の床は隙間だらけ、コインを入れてガスをつけるシステムの暖房では床上30cmくらいまでは暖まらず、ついにあきらめて経済性を優先させて毛布にくるまりながら、ほとんど暖房費ゼロで、下宿の奥さんが「サイベリア」と悲鳴をあげた厳しい冬を乗り切りました。

サウスアンプトンは戦災を受け、古きよきイギリスの町と言った感じはありませんでしたが、新しく復興された明るい親しみの持てる町でした。11世紀以後、しばらくは貿易港として栄えた港町であり、今でも15世紀頃の建物になるパーゲートが町中に保存されています。一度郊外に出ますと、背の高いオークなどの大木の生い茂る講演が広がり、白樺の街路樹のある民家の家並みは如何にもイギリス的で、道路沿いの各戸の小庭園には緑の芝生と花々の咲き乱れるまことに美しい風景が連なります。

私の通ったサウスアンプトン大学は郊外のハイフィールドにあり、1862年に創立の起源を持つ大学ですが、庭園を一望にできる食堂のある、愛すべきキャンパスを持つ大学でした。サウスアンプトンの近くにあるウィンチェスター、ポーツマス、バーンマス、ワイト島、ソールズベリー等の魅力的な町々への休日を利用しての訪問もまことに楽しく、強い印象を受けました。ホームシックもいつしか消え失せ、一年を経過していざ帰国という段階では、サウスアンプトンの町との別れが惜しく、町中を歩いては涙を流していました。

帰国に際しては、はじめはパリー、ローマなどなど2,3の町を見て帰ろうと思っていましたが、旅行社と相談しているうちに段々と欲が出て、ついには東欧を除くヨーロッパの53ヶ所の町々を汽車で廻る2ヶ月の旅を楽しませていただきました。フランスのマルセイユ港から再び船に乗って昭和38年の9月末に横浜港に帰着いたしました。帰国後も暫くは英国留学の感激は消えやらず永らく興奮状態が続いていました。

英国留学は私の人生に於ける劇的なインパクトであり、このような機会を与えていただいたブリティッシュ・カウンシルの関係者各位、サウスアンプトン大学の方々に心より感謝の気持ちを捧げさせていただきます。

(TANAKA Yasuo, 早稲田大学理工学部建築学科, 1962/63 University of Southampton)

イギリス外交文書に見る諧謔と懐疑

石田 憲

早いもので、国際政治史研究の一環としてイギリスでの調査を始めて10年の年月が経つ。ファシスト・イタリアの対外政策を研究する者にとって、1930年代外交史料の宝庫であるPublic Record Officeは、訪欧の度に訪れる場所である。各国の文書館を回り、多くの史料を読んできたが、イギリスの外交文書は、その中でも二つの点で独特と考えら

れる。

第一に、外交史料の中でも、読んで笑える文書というのは、他にそうあるものではない。第二に、いかなる重要な報告であっても、決して安易にその内容を信じないという点は、他国と比較して、際立った特徴と言えよう。イギリス外交の行動様式には、こうした諧謔と懐疑の精神が鋭く反映されているように思われる。以下、簡単に例を挙げて、そのイギリスらしさを確認してみたい。まず、1931年12月、インドの独立運動指導者ガンジーが、イギリス政府とのラウンド・テーブルを行なった帰路、イタリアに立ち寄った時のローマからの報告を検討してみよう。イタリアの各紙は、しきりにガンジーの反西欧性を強調し、彼がインドに戻って激烈な反英闘争を展開することを主張していることと書かたてている。当然これに対しイギリス在外公館からは、多くの報告が寄せられている。この点、事態はかなり深刻な様相を呈しているにも拘らず、様々な現地報告には、失笑を禁じ得ない箇所が続出する。ガンジーがローマ法皇との会見を望んだという噂に関する報告では、"his dress, or rather the absence of it" が、彼の政治的に微妙な位置と同様に警戒心を呼び起こしている、むしろ彼の服装について真っ先に言及されているところがおもしろい。また、ムッソリーニとの会見について英紙ジャーナリストがガンジーにインタビューしたやりとりも、別の報告では、以下のように記述している。「ムッソリーニと昨晚何を話しましたか?」「どうしてあなた方は、自然や花や動物たちの美しさについて、私に尋ねようとはしないのかね?」「しかし、ムッソリーニは最も興味深い動物ではないですか?」「なるほど、あなたは詩人かもしれない。」訳してしまうと原文のおかしさが薄れてしまうが、現地報告として大まじめにこれを載せている。一方、イタリア紙の対応やムッソリーニとの会見を実現させたことへのイギリス側の不満を和らげるため、当時のイタリア外相グランディは、意図せずしてこうした状況になったことを強調した。そして、ムッソリーニとの会見においても、「ガンジーにたかっている蠅をつかまえようとして失敗したこと以外、大したことは起きなかった」と主張した点が報告されている。しかし、同じ報告書の中では、ローマから出発した船上で、イタリア側の反英報道を否定するガンジーの発言が取り上げられ、両者の対比が克明に記されて、一方の情報に偏重することを避けている。こうした諧謔に満ちた報告が、この一件において特に顕著であるのは、ガンジーというこれまで西欧にないタイプの指導者を前に、半分は深刻に困惑し、半分は戯画的に描きたいというイギリス側の複雑な認識と欲求が存在したからだと思われる。ムッソリーニなど独裁者についての報告も同様に、おもしろおかしい言動を強調することは、逆に相手を侮ることにつながりかねない危険を持っていた。この辺のバランスが最も難しいところであり、同時に研究者も注意しなければならない点となる。

このような現地報告書の特性に加えて、本省での報告書の吟味の過程も、イギリス外交文書では十分に味わえる。文書館で編纂された1930年代の外交文書では、各部局のスタッフが送られてきた在外公館報告などに対して次々とコメントを書き加えていき、重要な案件では最終的に外務次

官、外相が書き込みを行った過程を見ることができる。一つの例として、エチオピア戦争が停滞していた1936年1月の時点で噂されたファシスト政府内の危機をめぐる報告に注目してみたい。この文書は、ローマ駐在イギリス大使が日本大使との話として本国へ報告したもので、ムッソリーニが健康上の理由もあって、バルボ將軍とグランディ前外相を加えた三頭政治に移行するという内容であった。しかも日本大使は、イギリス政府はムッソリーニと交渉するのを望んでいないのではと発言したため、イギリス大使は、これを否定した上で、イギリス政府がファシスト体制の崩壊を求めている点を確認している。

この報告に対しては、南欧局の中でもコメントが様々に分かれ、全く説得力のない内容という指摘から、「ローマ史にこうした類似の事例はない」といったコメントまで、興味深い違いが見られる。とりわけ後に歴史家となるE.H.Carrのコメントは辛辣で、現地報告書だけでなく他の局員のコメントにまで異議を唱えている。彼は一方で説得力がないという見解を避けながら、他方で三頭政治という話に疑問を呈している。その上で、ムッソリーニの完全な排除でなければ好ましい効果は得られないと、厳しい判断を下しているのである。これは、彼の他の同僚たちが、大使の報告内容に真偽いずれかの評価を与え、イギリス政府の立場について大使の意見表明を支持しているのと大きく異なっている。まさに歴史家としての面目躍如というところではあるが、恐らく外交官としてやっていく際には、このようなアカデミックな見方が煙たがられた可能性も想像される。

それでも、自国の在外公館からの報告に対しても、徹底した懐疑的な分析を加えていく姿勢は、イギリス外務省の特徴と言える。無論、他国の外務省においても在外公館からの報告が、そのまま、鵜呑みにされる訳ではなかったが、これだけシステムとして、こうした作業が確立されている所は類例を見ない。このため、多くの政策決定主体を基礎に置くイギリス外交は、ある特定の人物やイデオロギーが極端な影響力を及ぼすことが少なかった反面、当時外務省内で共有されていた「常識」から抜け出すことも難しかったのである。

諧謔と懐疑というイギリス外交文書に見られる特徴は、イギリスの歴史研究、ひいてはイギリス社会の一面を象徴的に表わしているのかも知れない。少なくとも私にとっては、各国の外交史料を渉猟しながら、特にブリティッシュ・カウンシルのおかげで、イギリスの文書捜しを満喫できた成果と言えよう。

(ISHIDA Ken, 大阪市立大学法学部, Grants in Aid, 1988,93)

第三回 BC 留学生

内山 正熊

先日、今年の学士院賞に松本達郎博士が選ばれたという新聞記事を見て、急に四十年前の1953年BCスカラーとして英国に留学したことを思い出した。松本博士はその年一緒に行った英国留学組の一人だったからである。温厚なものの静かな学究で、そのほゝえみをたゝえたおもかげが目

浮かぶ。その頃は今とちがって留学するのがむずかしく、たしか何百名もの志願者がBC試験を受けて十二名がパスして渡英した。レッドマン参事官というがっちりした英国人に面接されたのを覚えているが、その頃海外に行くのは仲々大変で、英国大使館に行ってビザをとるなど一苦労であった。暑い七月末、神戸からヴァンホイツというオランダ商船で香港へ行き、そこでP&Oのゴルフ号に乗り換えて一月あまり船上生活をして九月初めロンドンに着いた。今のように空路一日で行けるのとは大変な違いであった。留学生は当時珍しかったので途中寄港する各地で総領事の歓迎を受けた。シンガポールで二宮総領事を表敬訪問すると、まずは"山の神に相談して"と伺いを立ててから夫人手作りの心温まるパーティーを催されたのを思い出す。そのいかにも外交官らしい貫禄のある総領事がキャリア出身でなくバンカー出と伺ったが、占領解除直後の独立国として最初の駐米大使も日銀総裁であった位なので、銀行家出身の外交官があっても不思議ではなかった。シンガポール、ペナン、コロombo、ボンベイ、アデン、スエズと各地に寄港して、地中海を越してジブラルタル海峡を抜けて大西洋に出て、九月初めにロンドン港に着いた。第二回BCの脇坂京大教授が迎えに出て来てロンドン市内まで案内された。ユーストン駅に着き、タビストックスクエアの宿に落ちついたが、その間十二名のBC留学生は船上生活を共にした。その頃は船の食事も本格的で一日何回も黒人ウェイターの給仕を受けてディナーをする船旅をしたものである。

この期には大学教授が多く、理学、工学、医学などのドクターがずらりとならび、博士号のないのは文化系の三名くらいであった。船上の暇装行列に力武卓人教授が女装浴衣姿で登場したりして日本留学生団は異彩を放ったものである。ロンドンに着くとまもなく藤崎総領事が中国料理店で歓迎会を開かれたが、その後で、われわれはマンチェスター、エジンバラと各地へ散って行った。

その頃の英国はまだ石炭ストーブをたいて暖房をしていたので、冬になると詩的ではなく、まさにスモッグ黒い霧がたちこめ、真昼間でも真暗になるような日があった。本当に暗闇になるときがあって、鳥が寝ぐらをさがしてないのには驚いた。戦争の名残はまだあって、バター切れ、砂糖が小皿に配給されていたが、毎朝油の多い羊の肉切れにトーストという食事、風格ある英国の生活も、食事だけはまずかった。ビールを頼んでも日本流が通じずラガーというのを覚えた。

その当時、アメリカは朝鮮戦争などで戦勝国の国力を消耗していたのに、英国は戦争にかかわりをもっていなかったので落ち着いており、労働党内閣であったが、議会に行くと、議員がみんな学者やドクターの集まりのような雰囲気、論争も野次などは少く紳士的であったのに感心した。ゲイッケル労働党首などわれわれ学生グループのところに入ってきて話をされたし、ロンドン大学には金髪、銀髪の各国留学生が入り乱れて、まさに国際色豊かな留学生生活を送った。当時まだ敗戦国のコンプレックスもあったので、LSEのクラスでは敗戦国同士のよしみでドイツ人学生と親しくした。ベルギー人の留学生も親しくしたがいまはどう

しているだろうか。ちょうど女王戴冠式直後であったので街なみも整然としていた。バスの車掌も白人、女性駅員なども白人ばかりであった。その後行く毎にロンドンも変わって、段々汚くなり、駅員も車掌もカラードになってすっかり変わってしまったが、今はどうだろうか。

第三回B・C・スカラーもその後殆ど会わないが、京大の富田和久教授は先年逝かれたときいた。オックスフォードで彼に会ったとき白いマスクをして自転車で来られたのが印象に残っている。一緒に船で親しくなった井上孝博士は、その頃建設省にいられたが後に東大教授になったが、学園紛争の頃には安田講堂を死守したりした快男児だった。三十代の彼の雄々しい姿が目浮かぶ。

あの頃からもう四十年も経った。杉本博士の近況を知ってペンをとったが、今とちがって留学することには大変なことであった。月三十ポンドの手当では十分でなかったにせよ、英国で暮らした留学時代は、私の青春時代の最良の思い出である。ブリティッシュ・カウンシルの本部で日本担当をしていた、たしかミス・ヒルといった女性は、本当に親切ないい方であった。私が今中学留学生の日本語学習寮をやっているのも、B・Cから受けた好意から、いつの日にか日本でもやりたいと思った小さな種が芽を出したからである。

(UCHIYAMA Masakuma, 財団法人内山塾理事長, LSE & University of London, 1951/53, 75/76)

ケム川の流れは絶えずして…(続)

池島 大策

前回(第6号、1996年9月30日付け)も留学先のケンブリッジにおける出来事を記した。今回は、その続編ともいべきものである。昨夏(96年7月-9月)の訪英は、ケンブリッジ大学の国際法研究所(RCIL)にて再度研究論文のまとめを行い、スコット極地研究所(SPRI)にて最終的な資料収集とインタビューを行うことを主な目的としていた。少ない日々の中で、嬉しくかつありがたかったのは、人との交流であった。

今回ももちろん、RCILの訪問研究員として席をもらい、秘書のグレン(Glen)さんには非常にお世話になった。また、同研究所の賄いのストロング(Stronge)夫妻の友情に甘えて泊めていただき、研究と生活の両面に置いて非常に便利な条件を満喫させていただいた。ある晩、RCILの親友ファディ(Fadi)とともに、ストロング夫妻のディナーに招かれ、ローストチキンと克蘭ベリー・タルトを山盛りご馳走になった。相変わらず野菜はよく茹でてあって、サヤインゲンや人参、ブロッコリーはくたくたになっていたが、グレービーソースの味が程良いまろやかさであった。「毎日こんなご馳走を食べることができたらいいですね」とストロング氏に言ったら、「いやあ、うちは毎日こんなもんさ。」と言っておどけて見せた。相変わらずのアイリッシュ気質のジョーク好きが楽しかった。

今回の訪問でも、よく偶然知人に出会ったものである。例えば、RCIL前所長のラウターパクト(Lauterpacht, E.)教授は、私が着いてから最初の日曜日に教会へ行く道すがら、

自ら声をかけてくれた。向こうからやってきた紺色のサーブが急に真横に止まったかと思いきや、助手席の窓が開いて、「Tai よ、よく戻ってきたな。」と声をかけられたのは、びっくりした。研究のために滞在したハーグの帰りに、アムステルダムスキポール空港で、彼の好物の生のニンジンを買って、おみやげにしたら大喜びであった。この生ニンジンに玉葱を刻んでのせたやつを肴に、ジェネヴァーというオランダの強い酒で一杯やると最高なのである。また、前回の滞りで随分お世話になったスペンサー(Spencer, J.)教授にも、セルウィン(Selwyn College)裏にあるきれいな庭園を横切る小道を通ったときに偶然出くわした。「君に再会できたのはとてもうれしいよ。」と言っていたか誠実に光栄であった。彼が今ではケンブリッジ大学の法学部の運営会議の議長(日本の大学ならば法学部長に相当する)になっていたとは、後になって分かったことである。というのも、昨年の5月に新築されたスクワイアー(Squire)・ロー・ライブラリ(法学部校舎兼図書館)の落成式にエリザベス女王が来て、同大学の総長であるフィリップ殿下ともども、一新されてイギリス第一の(一説にはヨーロッパ随一との話もあるが)法学部図書館となったスクワイアーの開館を祝う式典の写真を見せてもらったときのことである。女王ご夫妻と同図書館の歴史やあらましを説明しているのが、あのスペンサー教授だったわけである。

偶然とは度重なるもので、この図書館でヨーロッパの法学部の会議が開かれた際、ローマ法の大家で女王勅任教授であるスタイン(Stein, P.)名誉教授に再会したときもそうであった。滞りの連絡をハーグから絵はがきで既に出していたものの、思いがけない場所でびっくりであった。彼は、いつものように優しい笑顔で「クイーンズ(Queens' College)と一緒に昼飯でもどうだい。」とお招き下さった。奥さんは、家の改築に伴うもろもろの仕事で忙しいらしく、お会いできなかったのは残念であった。しかし、彼も英国人らしく、「庭師を呼ぶことになっているのだが。」と庭いじりの話を一くさりしつつも、クイーンズの庭師を捜し出そうと窓をそわそわしながら眺めていた。

スタイン教授と同じく我が家と四半世紀に及ぶつきあいの、刑事法の大家ウィリアムズ(Williams, G.)名誉教授ご夫妻とお会いすることができたのも幸運であった。こちらが少々熱心にお電話をしたせいも、先生ご自身は今年で82歳の高齢で、もう足もたいぶ弱っているようであったが、奥様はとてもお元気の様子で、お二人でアフタヌーン・ティーに招いて下さった。先生ももう年なので息子さん家族のいるレスターの方へこの春に引っ越すそうである。長く住み慣れたケンブリッジを離れ、息子のいるレスターへ行くとのことであった。「それは、寂しいでしょうね。」と申し上げると、「何事にも終わりはあるものよ。」とご夫人は達観されていた。帰り際、ご夫人はタクシーを呼んでくれたのだが、私が交通の不便な先生のお宅に遠路はるばる来たのがよほど嬉しかったのか、こちらを制止するかのようになんか運転手にさっとポンド札を握らせ、「この紳士を街までお願いします。」と毅然と告げた。9月の寒い風の中、お二人でわざわざ道路まで見送りに来てくれた。

ウィリアムズ教授と同じジーザス(Jesus College)に縁のあ

るガードナー・スミス(Gardner-Smith)夫人は、可哀想にも、足に院内感染した傷が半年近くたっても治らず、ベッドに寝ていることが多かった。それでも、こちらが何度か見舞いに訪ねていくと快く迎えてくれた。毎夏恒例のクロケット(croquet)を何度も開いてくれて、近所の方々を招いては、アフタヌーン・ティーを楽しみながらの一時を過ごすことができた。昨夏、ともに一戦を交えた人々と再会を祝して、技を競い合った。ジーザス出身の現在医師の紳士は、何十年来のテクニックに何らの衰えを見せず、カレッジでの昔とった杵柄とでも言わんばかりに、巧妙なショットを連発した。近所に住んでいるというだけでお食事会の常連客にさせていただいたというほかに、ご夫人を通じて知り合った方々との交流こそがケンブリッジの良さという気がしている。

またクリスマスカードの季節がやって来た。上記の方々すべてとカードを交換したことは言うまでもない。RCILの現所長のクロフォード(Crawford, J.)教授からは、所員やスタッフの寄せ書き入りのクリスマスカードを頂いた。2年前のクリスマスパーティの梯子をしたのもついこの間のこのように思い出される。その際、私を訪ねてきた大学の弟子の一人が、RCILで研究している主任研究員やスーダン大使らと直々に接することができたため、感銘を受けて帰って、この秋からロンドン大学に留学することになった。また、イギリス好きになったもう一人の弟子は、ケント大学の博士課程で学び始める前に私を訪ねた際に、RCILで開いたバーベキュー・パーティに合流して、ケンブリッジの雰囲気を感じる存分味わっていった。

昨夏の滞りの最後の夜は、ファディらの親友が私のフェアウェル・パーティを開いてくれた。延べ20人以上にもなる参加者が皆、別れを惜しんでくれて、再会を誓ったときには、「ケンブリッジに帰ってきて良かったなあ。」としみじみ思った。普段は渋い連中もこの時ばかりは随分とお酒やつまみを用意してくれた。それも結構残ってしまったのは、きっと話が盛り上がったせいであろう。

ケンブリッジは、私にとって学問・研究の拠り所であると同時に、人との交流の場所であり、親交や友情を確認できる素晴らしい暖かな故郷である。何度帰ってきてもいいところである。「物事にはすべて終わりがある。」というのも一つの見方かもしれない。しかし、この地での人と人との出会いや交流には、終わりがいいのではないだろうか、とケム川を見ながら考えた。やはり、昨夏もケム川は絶え間なく流れていた。

(IKESHIMA, Taisaku, 慶應義塾大学総合政策学部, University of Cambridge, 1994/95, ikeshima@sfc.keio.ac.jp)

【UK 98 へのご案内】

英国大使館と読売新聞社は1998年に日本各地で各種の文化、芸術、ライフスタイル、科学技術など、英国が誇る創造性と多様性を反映するUK 98という催しを企画しています。各種のイベントがUK 98の公式イベントとして資格を得ることもできますし、BCJAでも現在なんらかの企画を考慮しています。この件に関しましてご提案がありましたらぜひ事務局までおしらせいただければ幸いです。

【編集後記】

今回も多数の貴重な原稿をお寄せいただきました。残念ながら紙面の都合上、次号に掲載させていただくものがあり、お詫び申し上げます。

毎号思い知らされることですが、40年前の英国への船旅の時代からデジタル・ライブラリー・トライアングル構想のような現代までさまざまな分野でさまざまな方々が活躍されている様子がこのNewsletterをとおして垣間みることができます。Newsletterの行間から伝わってくるのは、「British Councilによる留学が自分の人生を決定した」、「この留学がなかったならば現在の自分はないか」、というBritish Councilが私たちに提供してくれた途方もなく"generous"なはからいに対する深い感謝の念のような気がします。そのような意味で今後私たち自身が逆にこのような機会を提供していくことができればすばらしいことではないかと思えます。

(東京女子医科大学 平 孝臣, ttaira@nij.twm.c.ac.jp)

'65年秋から冬、英国の音楽会(上)

木村 精二

本紙No.4の拙稿『英国の音楽会詣で』は、1965年秋から半年の間に見聞した34回の催しを、概観したものだった。今回は、同文中の「・ウィグモア・ホール1回、ほかに国内4回・」合わせて5回の音楽会行きを個別に取り上げ、後日談も加えて、駄文を重ねたいと思う。上記拙稿の続きとして、ご一読いただければ、幸いです。

1) オペラ「セヴィリアの理髪師」

(サドラーズ・ウェルズ)

筆者のロンドン到着は1965年9月24日、早々にブリカンの担当者と初回の打合わせを済ませ、4日後の28日に同地で初めて触れた生の音楽が、英語訳の「セヴィリアの理髪師」(指揮/ヘンリー・クリップス、フィガロ/J. H. ナッシュ、ロジーナ/J.エディ、医師バルトロ/E.シリング)であった。場所は地下鉄のエンジェル駅から数分のサドラーズ・ウェルズ劇場、切符は公演の前日に購入して25シリン

グ、約1300円。かつてイタリア歌劇団が来日して、このロッシーニの代表作を原語で上演、超一流の声と舞台をよく覚えていたためか、ロンドンでの英訳オペラは期待外れだった。それに加えて、初めての長旅に時差ボケから回復しなかったようで、夜11時の終幕近く、眠気をもよおした。当夜のプログラムに筆者が残したメモは、出し物にはまったく触れず、幕間に求めたバニラ・アイスクリームが、4.3オンス(122グラム)で1シリング3ペンス(約60円)、というまことにお恥ずかしい内容だった。同劇場は、第2次大戦中に一時閉鎖して、焼け出された市民の避難所となった。45年6月7日の再開初日、ベンジャミン・ブリトウムの歌劇「ピーター・グライムズ」を世界初演、以後イギリス・ナショナル・オペラの根拠地で、ローヤル・オペラが古典的かつ原語上演を守っているのとは対照的に、英語でしかも斬新な演出を取り入れるのを特徴としてきた。歌手はすべて英国人、いや正確には英語国人だけ、という。同オペラ団は、フェスティヴァル・ホールと旧ロンドン市庁舎の間の新ホールに、とプログラムに記してあった計画は実現せず、68年からナショナル・ギャラリー近くのコリシウム劇場に移った。その後のサドラーズ・ウェルズ劇場は、国の内外から来演する演劇や歌劇団の活躍する場となっている。数年前、いや正確にいうと91年3月4日、松本幸四郎が主演(アンナ役はスーザン・ハンプシャー)の「王様と私」に偶然行き会い、久しぶりに同劇場を訪ねることが出来たのは、幸いだった(ついでながら入場料は25ポンド、約6500円)。

2) 「モスクワ・フィル演奏会」

(ローヤル・アルバート・ホール)

ハイド・パークとケンジントン・ガーデنزの境目近く、道をへだてて南側に立つ、巨大な円形の苔むしたような外観のローヤル・アルバート・ホール。客席数6000以上で、音楽だけでなく、ボクシングだとか、そのほか多目的の会合にも使われるが、夏のあいだ毎晩のように開かれる低廉な料金の「プロムナード・コンサート」で、良く知られる。65年10月9日夜8時、モスクワ・フィルハーモニー・オーケストラ演奏会が開かれ、管弦楽を堪能した。指揮/キリル・コンドラシン、独奏/ダビッド・オイストラフとムラストラフ・ロストロポーヴィッチ。曲目は、ブラームス作曲バイオリンとチェロのための二重協奏曲、チャイコフスキー作曲悲愴交響曲などだった。ロの字に強いアクセントをつけて「プログラム!」といいながら身なりの良い売り子が、客席の間を縫って行ったあと、テレビ中継するためとかで非常に眩しいライトの中で全員起立、イギリス国歌とソビエト国歌の演奏が始まった。

私の席はアリーナBの第4列目1番、料金は63シリング(当時の換算率で3200円)。国歌の次に小曲、モイセイ・ワインベルグ作曲のシンフォニエッタ第1番が演奏された。プログラムによると、作曲者は1919年ワルシャワの生まれ、ナチに家族を殺されたポーランドから逃れて苦難の道を通り、ミンスク音楽院を卒業、43年からモスクワに住む。8つの交響曲、2つのシンフォニエッタのほか、多くの室内楽曲、バレエ、映画音楽を作曲、シンフォニエッタ第1番

は48年の作、初演はキエフで好評を得、続いてモスクワで演奏されたという。フル・オーケストラ用の曲で4楽章から構成され、ポーランド民族音楽の影響を受けているようだ。続いてブラームスの二重協奏曲。日本で聴くことのできなかつた父オイストラッフのヴァイオリンに、異国の地でしかも数メートルしか離れてない所で接するとは、感無量だ。名チェリスト、ロストロポービッチの顔を真っ赤にしての力演に呼吸を合わせ、オイストラッフの響きが最高潮に達して、コンチェルトが終った。「悲愴」の第3楽章の終りで拍手が起ったのは意外な感じ。アンコールに応じてメンデルスゾーン「真夏の夜の夢」から1曲がサーヴェイスされた。

日刊紙『ザ・タイムズ』に載った「ソ連のコンサート、完璧と言えず」という見出しの批評を少し紹介しよう。「…(オイストラッフとロストロポービッチが競演したのは初めてという)ブラームスのダブル・コンチェルトは見事な演奏だったが、最高の出来とは言いがたい。ホール又は指揮者のせい、あるいは…のためか、このスケールの大きい作品が極めてせせこましい出来映えだった。又はテレビの眩しいライトとカメラから生じた高周波の不愉快な雑音の影響かも知れない。原因がどこにあったにしても、オイストラッフの特徴として知られる線の太さや音色の重みを作り出してくれなかつたし、ロストロポービッチも十分に力量が発揮できなかつた。…第3楽章のメインテーマは機敏にフレーズされ、装飾十六分音符によるソリスト達の対話が輝かしく広がった。しかし本当に2巨匠が旋律に深く食い入り、音調の力強さと音楽的衝動をフルに表現したのは、終曲近くの歓喜に満ちた長調の調べになってからだ。これこそ我々が待ち焦がれていた演奏だったのである」。

翌66年3月までの滞英期間中、またその後も近くを回りかかることが何回もあったが、再び中に入る機会はやって来ない。しかし一度訪ねたこのホールは、不思議に何年経っても忘れ難く、新聞や書物に載る小さい関連記事も、目に留まることが多い。上記の音楽会とほとんど同じ時期に、国際的な詩人A.ギンスベルグらを招いたリサイタルがあり、しかもちょうど30年後の95年10月16日に、同じホールで同じ企画が行われ、同じ詩人らが集まった、ということ、月刊雑誌「英語青年」(96年1月号)で知った。それは、30年ぶりに拙稿を纏める最中だったのである。

3) 交響曲「合唱付き」(アッシャー・ホール)

65年11月末、ブリカンのお世話で、スコットランドとアイルランドの研修旅行に出た。滞在わずか3日足らずのエディンバラで12月の初日に、市庁舎などで用務を済ませたあと、ベートーヴェンの第九演奏会に出会う、というチャンスに恵まれた(ロンドンでは、東京いや日本と違って、年末に第九が恒例ではないことを嘆いたところだった)。夏はエディンバラ音楽祭で切符がなかなか買えないというアッシャー・ホール、この時期は直前でも容易に入手できたのであった。

席はブロックA、6列目21番、5シリング半(約280円)。第4楽章の声乐部分は日本では滅多に聴けない英語訳。演奏/リード交響楽団(創立50年目)、指揮/シドニー・ニュー

マン(25回目のシーズン)、首席奏者/ジョン・フェヤバーン、合唱/大学音楽協会、ソリスト/E.シモン、J.ミッチンソン、M.ダックワース、J.ホームズ。演奏曲目は、ベートーヴェンの前に、モーツァルト作曲のジュピター交響曲という盛り沢山だった。夜7時半に開演、ニューマン氏は額から流れ出る汗を拭こうともしない熱演で、若い楽員はその期待に応え、良い演奏を聴かせてくれた。割れるような拍手で幕が下りたのは10時過ぎだった。筆者は終演と同時に楽屋へ、当夜のプログラムに同主役のサインを戴くことができた。

それから24年。エディンバラ天文台視察の旅で同地を訪ねたとき、同じホールでフランス・フィルハーモニック交響楽団の演奏会に巡り合った。曲はメシアン作曲の「四つの交響的メディテーション」、ラヴェル作曲の「ワルツ」ほか。89年8月29日のことだった。

(KIMURA Seiji, University of London, 1965/66,76)

'65年秋から冬、英国の音楽会(下)

木村 精二

4) オラトリオ「メサイヤ」(オデオン劇場)

12月19日(日)夜7時半から、ヘンデルの「メサイヤ」をロンドンで聴いた。場所は地下鉄スイス・コテッジ駅に近く、オデオン劇場、演奏はローヤル・フィルハーモニック・オーケストラ、指揮レイモンド・レップルド、合唱はインリッヒ・シュッツ・クワイヤ。同合唱団は62年の創立だから、誕生したばかりといえよう。今シーズンは、ローヤル・フェスティヴァル・ホール、ウエストミンスター寺院のステージにも立つとのこと。教会で聴けば、きっと更に印象深かったと思う。

当夜のプログラムに載った署名(ロビン・ゴールディング)入りの曲目解説を、少々紹介しておこう。「…同時代の作曲家と同様に、ヘンデルも書き上げるのは早かったが、何とメサイヤは1741年8月22日から9月14日、つまり僅かに23日間で完成してしまった。同年初めデヴォンシア公ルーテナント卿からアイルランドのダブリンで開く慈善演奏会に招聘したいという話があり、そのためにこの新しいオラトリオを仕上げたのである。しかしヘンデルはロンドンで不評を受けたあと、同じ曲をアイルランドに持ち込んだ、という説が広く伝わっていて、それは伝記作者マインウォーニング(1760)の記述に因るが、確実な根拠に乏しい。(少年のときチェスターでメサイヤのリハーサルを聴いたことがある)バーニー博士は、自著「音楽の歴史総説」(1776-89)の中で、一節を使ってマインウォーニング説の誤りを証明している。メサイヤの初演は1742年4月13日、ヘンデルがダブリンで人気絶頂のときだった。会場はフィッシュンブル通りニールズ音楽ホールで定員六百人だったが、フォークナーの新聞に大きく載ったため、主催の慈善音楽協会は淑女にはフープ(スカートを広げる張り骨)を着用しないよう、紳士は剣を持たないように求め、七百人の聴衆を入れることができた。ホールを埋め尽くした観客の得た優雅な喜びを十分に表現する言葉が、容易に見つからない。ヘンデルはハレルヤ・コーラスのパートを作曲し

ているとき、目から涙を流しながら、『私は天国を目の前に見た。偉大なる神の姿をも見た』と側の者に告げたという…。筆者は運良く、ダブリンのメサイヤ初演の地を、65年と89年の2度訪ねる事ができた。建物自体は現存するが、内部をすっかり改造したため、ホール面の影は残っていない。入口にブロンズ製の銘碑が掲げられ、「…ヘンデルがメサイヤを初演したこの古いミュージック・ホールを記念して…」と読めた。ロンドンのオデオン劇場は、引き続いて開いているのだろうか。手元のロンドン劇場一覧には見当たらないようなのだが、と知人のLさんに問い合わせたところ、「昔のままよ、隣のレストランも賑わっているし、何も変わってません」との返事に接した。96年春のことだった。

5) 歌曲「冬の旅」(ウィッグモア・ホール)

66年1月18日、オックスフォード通りに程近いウィッグモア・ホールで、シューベルトの傑作、冬の旅」を楽しんだ。バリトン独唱フランシス・ロリング、ピアノ伴奏パウ・ハンバーガー、料金は自由席で4シリング(200円)。いま手元にあるプログラムは無料だったはず、歌詞(英訳)をタイプ印刷したザラ紙4枚の片隅を、ホチキスで片面刷りの表紙に留めただけの質素この上ない代物だから。しかし、多色刷りの豪華な厚いプログラムに慣れ過ぎた目には、この方が貴重で大事な記念の資料なのである。

ここは学校の講堂に椅子を並べただけというようなホールで、定員僅かに550名、まことにこじんまりとしており、音響効果は案外とすぐれた方であろう。場を踏んでいるとは思えない若きバリトン歌手の声は、とても初々しく、快く耳に入ったように記憶している。翌19日の朝刊には「リード歌手のための試金石」というタイトルの批評が載り、「ロリングの発音は自然なドイツ語になりきっており、ニュアンスとレガートの取り方も適切だが、ジェスチャーとスタンスの変化が歌に新鮮さを加えることには成功しなかった。また、『冬の旅』の深遠さに迫るべく努力を続ければ、さらに魅力的な解釈を聴かせてくれるだろう」と、新人を励ます好意的な言葉で結んでいた。

このホールは、新人の登竜門として国の内外に広く知られ、日本の音楽家もしばしば登場しているという。しばらく前の正月早々に訪ねたときは、ホット・コーヒー付きのしかも手軽な料金で、午後のヴァイオリン・リサイタルを聴いたこともあり、筆者にとっては、親しみの持てるホールのひとつなのである。

音楽愛好の士にここで室内楽を味わって欲しいと願い、数年前に書いた拙文の一部を、結びで紹介しておきたいと思う。《…『今週のロンドン』という無料配付の小冊子をパラパラとめくって目に留まったのが、「第8回クライバーン国際ピアノコンクールで金賞獲得のアレクセイ・サルタノフの演奏会—ショパンのスケルツォ1番と2番、リストのメフィスト・ワルツ1番、プロコフィエフのソナタ第7番等など。5日7時半開演、数百円から3000円。まずはお電話でウィッグモアホールへ…」という記事。去る9月5日のことでした。その翌日は2週間過ごしたブリテン島とアイルランド島に別れを告げることになっていました。

泊りは…幸いなことにホールとの距離は歩いて十分足らずです。その日の午後7時、着飾った紳士淑女らに混じって同ホールへ到着。入口で買い求めた赤い表紙のプログラムを開くと、「…10月17日ベレソフスキー、11月26日プレトネヴ、12月1日オヴチニコフ、…2月23日キーシンのピアノ・リサイタル。曲名は…」—文字通り「ソヴィエト・マスター・ピアニスト」の競演がつづくとの予告が載っています。

まだ間に合うでしょう。この冬にロンドンを旅行する方が居られたら、ぜひウィッグモア・ホールもご鼻屑に! 入場券はありませんが、プログラムを差し上げます。…キーシンの演奏曲目は後日発表…》(89年12月、音楽サークルの機関紙「月刊名曲散歩」第304号所載の「イギリスでソ連のピアニストを聴きませんか」より)。

(KIMURA Seiji, University of London, 1965/66,76)

英国留学と登山医学

上田 五雨

日本アルプスの命名は1888年に来日した英国の宣教師W. Westonによる。世界を切りひらいて行ったイギリス人と、誰かの後ろからくっついて行く性質の日本人の違いを、英国に1960年度に留学し、その後も英国の同業者(登山医学者)としつきあったりして、感じたので、その体験について話してみたい。

日本では文化の進展は、中国の影響、アメリカの影響があり、先ず外国から学んで安全度の確認されたことを実行しようとする。英国でもギリシャ、ラテン等の文化の吸収から、自国の文化が築き上げられたと思うが、西洋化と言わず現代化と言う言葉が色々な点で用いられているのに留学の頃感心した覚えがある。

私は信州大学に在職し日本アルプスにも近かったため、高地医学の勉強もしてきた。そのため松本で1987年には国際登山医学会を開くこととなり、英国からは登山家で内科医であるC. Clarke先生を呼ぶことにした。しかし、彼の英語は学会で聞いていると、うまくないと言う同僚の評もあった。恐らく、それは、アメリカ式の流暢な英語で無かったからだと思う。下手な管はないので、私は彼を日本へ呼んだ。後に直接聞いた限りでは、彼は外国人に分かり易くするためにわざとゆっくりと明瞭に、しゃべってくれているのだと分かった。彼は、高地脳浮腫についての第一人者である。

たまたま199年にスイスの国際登山医学会に参加した際、彼と同じホテルに宿泊することとなった。そこから学会場へは直線距離で近い筈だが、道路が迂回していて実際は20分位かかることが分かった。学会の前日に色々検討し、直線距離に沿う方向に裏道があるかどうか、下調べを私は行った。或る道は袋小路になって引き返さざるを得ない。しかし車の通れない細道が一本だけあるのを見つけ、7分位で、会場とホテルを行き来することが出来るのを知った。そこで、学会の初日の終わりに、彼と一緒に、近道を教えて帰ることとした。その途中、傾斜地で斜めに道がついて

いる所で、彼は、突然、道なき斜面をまっすぐに、下降してしまいました。私には危ないので、多少遠廻りだが、道に沿って斜面を下った。道のない所を直滑降することは、違法ではない。此が、文化を切り開く方法かと感心してみている。あとは一緒に、裏道を通って、無事に、ホテルに帰った。英国式の大膽な進路決定と、日本式の小心な決定の合作で、会場への通勤時間はかなり短縮合理化された。私は仮に、この決定法を Clarke - Ueda の方法と名付けてみた。その後も物事の決定には時々応用している。

1991 年秋、第二回の国際登山医学会を松本で行った時に彼はエベレストへ行く仕事があり、別の医師 J. Miledge 先生をロンドンから招待することとなった。彼も松本滞在中に日本アルプスに登られ、会席ではギリシャ神話の教養なども披露され、学術成果を上げて、帰国された。

1960 年来、英国との関係が続き、更に 1998 年に国際登山医学会本部(Geneve) からの依頼の学会を、松本で行うように準備が進められている。私はそのほうの役職もしているため、多くの方と接触できたが、その端緒は 1960 年の英国での生活であったと考えている。その後も 1977 年と 1984 年に英国を訪れる機会があった。大膽ではあるが、しっかりした常識の上に立つ英国の文化の洗礼を受けたことは、私にとって大変幸福なことであった。この際ブリティッシュ・カウンシルの方々には厚く謝意を表したいと存じます。

なお、留学中の恩師 A. Harper 先生は今年なくなられ、哀悼の意を捧げます。

(UEDA Gou, 諏訪湖スパクリニック院長, Medical School, Newcastle, Durham University, 1960)

◆ 講演会報告: 「IBM/デ・モントフォート電子図書館プロジェクト」 by Dr Peter M W Robinson

梅本 美子

昨年 12 月 17 日、ブリティッシュ・カウンシルで上記の講演会が催されました。時宜を得たテーマであったため、多くの関係者の関心と呼び、盛況な講演会でした。ここにその概略を記載いたします。

《講師略歴》 ロビンソン博士は中世英語及び英国中世文学の研究者。デ・モントフォート大学の国際電子図書館研究所員としても、電子出版、研究のためのテキストデータベースの作成の分野でパイオニア的な業績をあげている。現在デ・モントフォート大学 (De Montfort University) 国際電子図書館研究所研究員

■ プロジェクトの始まりとその過程

TARDIS Digital Library はデ・モントフォート大学と IBM の共同研究として開発された。この世界最高の電子図書館を構築するという大きなプロジェクトが、先進国あるいはオックスフォード、ケンブリッジなどの有名大学ではなく、なぜ英国 Leicester の学生数わずか 8,000 ほどの新設大学で始められたのであろうか。

1992 年に大学となったデ・モントフォート大学の前身はポリテクニク(大学レベルの総合技術専門学校、1992 年廃止) であるが、5 年近く経った現在、学生数 29,000 に達

するという、ヨーロッパの中でも急速な発展を遂げた大学の一つである。学生の増加に伴い蔵書僅か 45 万冊のこの大学は、図書館サービスの低下が悩みの種となった。しかし、急速に大量の書籍を購入し、それを所蔵することは不可能であり、これが電子図書館プロジェクトの創設の発端となった。内の図書を 10 ケ所の分館に分散することを防ぐためにも電子図書館の開発が進められることになった。

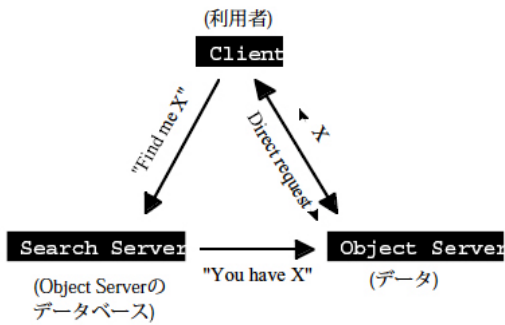
電子図書館の実験的プロジェクトは既に 5 年前から始められていた。例えば、紀要、ジャーナルなどのコンピュータ検索のための ELINOR、EU によって始められた、映像をフルカラーで検索可能な ELISE (Electronic Library Image Service for Europe) などのプロジェクトである。個々のプロジェクトはうまく進行したが、それらを一つの電子図書館としてまとめることは容易ではなかった。プロジェクトの統合、調整のために、1995 年に国際電子図書館研究所(International Institute for Electronic Library Research) が設立され、専門家が集められた。450 万ポンドを投入した、600 名収容可能な電子図書館が 1997 年の春にオープンする。

ここには、コンピュータの端末が用意されているだけで、一冊の図書の所蔵もない設計である。電子図書館は、24 時間、そして、1 年 365 日利用されるわけで、膨大な情報量の伝達、移動のために多くのハードウェア、ソフトウェアが必要となる。そこで 1996 年、産業都市 Leicester に急成長したデ・モントフォート大学と世界最大のコンピュータ会社 IBM の不思議な取り合わせのカップルは電子図書館の設立に合意することとなった。コンピュータが扱うことのできる、音響、書物、映像、音楽などの情報を安価に利用できる状況になってきたことから、加速度的に音楽、フィルム、書物等がデジタル化されており、IBM はこれを大きなビジネス・チャンスととらえた。

■ デジタル・ライブラリー・トライアングル及び、著作権管理について

IBM はデ・モントフォート大学のために、下図のようなデジタル・ライブラリー・トライアングルというデジタル・ソフト・システムを採用した。この三角の規模はどのようにでも拡大でき、100 のサーチ・サーバーがオブジェクト・サーバーに指示を送ることもでき、指示したクライアントに最も適切な情報を送ることができる。IBM はデジタル・ライブラリー・トライアングルの機能を拡大し、また様々検索方法をも開発した。このトライアングルは、将来のデ・モントフォート大学図書館の電子図書館の強固なベースになるものである。

Digital Library Triangle



IBM は著作権管理の問題解決に 7 年もの歳月を費やしている。デジタル化された情報の検索の場合、「著作権に触れない範囲」、または「許可を得たもののみが情報を検索できる」という著作権の管理システムが必要である。著作権所有者、あるいは著作権料の支払者は誰かということが、検索時に表示される著作権の管理方法を開発したのである。

■ そこでデ・モントフォート大学としては何をするか

IBM のビジネスはこれまで企業相手のコンピュータに慣れた人間を対象としてきたため、デ・モントフォート大学が第一に為すべきことは、コンピュータに不慣れた人間の多い大学図書館というものを IBM 側に理解させることであった。第二に大学が企業と違っているのは、「扱う情報の質、種類が、書物、新聞、ジャーナル、映像など多岐にわたること」であり、そして、利用者も学生から研究者までおり、コンピュータ初心者から専門知識を有する者までいるということを IBM に理解させる事である。第三に大学が寄与できる点は高度な構造の複雑なテキストを大量に提供することである。

■ 電子図書館構築のためのキー要因

デ・モントフォート大学が世界で最高の電子図書館を構築するためには、次のようないくつかのキーとなる要因がある。

1. 管理

電子図書館への新データ導入や、既存データの再構築が容易であることが重要である。サービスの向上のために誰が何のために電子図書館を利用しているのかを知ることが必要である。

2. アクセス

図書館には著作権を有する資料があり、そのために大学図書館を一般に公開することは難しく、大学の学生しか情報にアクセスできないという制限を設けることが必要になる。アクセス・コントロールには二通りの方法がある。一つはインターネット・アドレスによるもので、いくつかの資料は新しい図書館のターミナルからしかアクセスできなくなる。次は利用者 ID とパスワードによるもので、すべての学生にこれらが割り当てられる。アクセスの管理は制限を設定することだけでなく、情報を確実に提供するという意味も含まれる。そのために新しい図書館には高性能のコンピュータを用意することになっている。

3. インターフェイス

デジタル・ライブラリーにおける第3の重要な要素はインターフェイスである。デ・モントフォート大学には図書館システムのインターフェイスの専門家がいて、そのスペシフィケーションを用意する。一つのインターフェイスから異なった資料、即ち、映像、文章、音などを検索することができ、それらがあたかも一つのコンピュータの中に入っているかのように見えることが望ましい。

4. 内容

どのようなソフト、システム、インターフェイスがあっても、学生、教職員が必要とする情報が提供されなければこのようなコンピュータシステムは無用の長物となる。成功の要因は一重にその「内容」の充実である。

■ 電子図書館の果たす機能

デ・モントフォート大学の電子図書館としてできることが、既存の出版物をデジタル化したものにアクセスすることだけでは期待はずれである。既存の出版物以上の機能が果たせることがあって初めて電子図書館と言える。そのためには次の2つのことが出来なくてはならない。

1. 出版が不可能な資料へのアクセスが可能であること

写本、初版本、古代の書物のイメージのデータバンクを作成し、デ・モントフォート大学が所有している芸術作品、絵画、築物、彫刻といった作品の映像も、やがてはインターネットを通してアクセス可能にしたいと考えている。

2. 出版物では不可能な方法での利用が可能であること

カンタベリー物語の電子出版には映像も含まれており、普通の出版物としては不可能な、各地に散在する手稿本などの映像を一度に比較して見る事も可能である。これらデータベースからの情報を通して、学生、学者が独自の分野の分析、研究をすることができる。Samuel Johnson の辞書にしても、初版、第4版と改訂が進んでいく過程の変遷、違いを分析することができる。こうした比較、対照が瞬時にできるのが電子図書の特徴である。デジタル化が進むと読書量が減るのではとの懸念がしばしば口にされるが、その逆が言えそうである。電子図書館では特定の本のオリジナルの初版本や、順次に出版された改訂版を比較して読むことができる。本当に「読む」ということの、再発見がなされるのではないだろうか。

■ 終わりに

このように電子図書館というのはデ・モントフォート大学だけ、あるいは限られた範囲内でなされることではなく、インターネットの現代社会においては、世界中の大学図書館をネットワーク化して、世界中の様々な図書館で情報検索ができる状況にならなければならない。

デ・モントフォート大学は世界最高の電子図書館の構築を目的としているが、それが実現の暁には全世界でアクセス可能なものでなければならない。現代社会では一つの図書館が世界最高であるということではなく、全世界の情報、又、全世界の大学の情報を利用することができる電子図書館になってゆくのである。デ・モントフォート大学でのデジタル化の開発がさらに進めば、世界中のさまざまな図

書館で利用可能になるであろう。したがって、大学だけが
個としてのプロジェクトを進めているのではなく、皆様と
共にプロジェクトを進めているとお考えいただきたい。
(UMEMOTO Yoshiko, ブリティッシュ・カウンシル, Library
& Information Provision Assistant)